

## 2018年記憶に残った本

## 1. 「実践 快老生活」 渡部昇一著 (PHP新書)

渡部昇一氏(上智大学名誉教授)の遺作だ。上石神井支店長時代に練馬区在住の渡部氏は外為取引先であったので、ご自宅にも何度か訪問した。書斎の蔵書は図書館並みで、ご家族は学術と芸術を愛する一家だった。そんな思い出もあり老後の生き方・過ごし方を学びたくて読んだ。

「歳を重ねても記憶力は衰えない」、「充実した人生の為に「機械的」に学ぶ習慣が」良い、「家族友人との集まりをどんどん開こう」と説いている。そして学者人生を回顧して「老後人生で本当の幸福は家族」だそうだ。

尚老後人生への手引書では五木寛之著の代表作「林住期」も参考にしている。古代インドの人生の過ごし方として50歳～75歳までの25年を林住期というそうだ。充実した老後人生のありようを説いている。人生100年時代、時々読み返したい2冊だ。

## 2. 「藤田寛之のミスをしないうるゴルフ」 藤田寛之著 (角川新書)

ゴルフを初めたのは28歳なので36年経った。ロンドン勤務時代には年間50回以上郊外のゴルフ場に通ったものだ。爾来ゴルフ書をいろいろ読んで上達を目指してきたが2年前に右肘を痛めてからおかしくなった。

そんな鬱々としていた時に書店で出会ったのがこの本だ。目から鱗が落ちるような心境だった。その時の悩みは、バンカーショットとパットだった。この解決法を藤田流に解説している。非常に解かりやすく即実践できる内容だった。

藤田氏曰く「不安は練習でしか消えない」とのことだ。それで近くのゴルフスクールに通い始め、担当コーチから「自分流ゴルフ」の指導を仰いでいる。最近また成長軌道に戻ったようだ。

## 3. 「赤めだか」 立川談春著 (扶桑社文庫)

2008年4月単行本として刊行(文庫版は2015 DVDは2016年)。

立川談志師匠が日本落語協会から独立して間もない頃、佐々木少年(当時17歳、著者)が弟子入りしてから成長する過程を描いたエッセイ集だ。その後嵐の二宮君が主演のTVドラマになった。

落語に興味を持ったのは2005年に鈴木演舞場で鑑賞した時だ。それまではTV番組「笑点」だった。想像力を最大限奮い立たせながら、演技者と聴衆が一体で楽しむ落語は、非常に知的な娯楽だ。その歴史は古く演目も多い。笑いだけでなく人情小話も良い。最近では上方落語の三枝師匠など創作落語も根強い人気がある。横浜では「にぎわい座」が有名で、館長は歌丸師匠だった。

## 4. 「センゴク天正記」「センゴク一統記」「桶狭間」「仙石権平衛」 宮下英樹著(講談社青年コミック)

TSUTAYAの青年コミックコーナーに「センゴク」シリーズが並んでいる。

「センゴク天正記・一統記」は、戦国武士の仙石権兵衛秀久の出世物語である。権平衛は歴史上実在した人物だが、吉川英治の「宮本武蔵」や司馬遼太郎の「龍馬」と同じく、この本が出るまで無名だった。

著者の戦国観、歴史観、指導者論、武士道論が凄くユニークで面白い。また多くの古文書や歴史書も引用されており時代考証も優れている。さらに著者が桶狭間や長浜など歴戦の戦場に赴き、現場検

証もしており、独特の時代考証と戦闘シーンも見事だ。

「桶狭間」は、今川義元が戦国大名の原型を創造し、三河の大名として成長する過程が描かれている。義元は今川家の5男だったので、幼少期は京都で僧侶として育てられた。この時期の育て親が雪浜で、義元を棟梁に押し上げた。義元は軍事と共に地域経済繁栄の知見が優れていた。時代の変化にも敏感で大大名に成長していく。

「仙石権平衛」は、秀吉がほぼ日本統一した後、徳川家康、和歌山の根来衆、四国の長曾我部親子、九州の島津4兄弟との死闘を描いたものだ。

5. 「中国のインターネット史 ワールドワイドウェブからの独立」 山谷剛史著（青海社）

年末に中国の通信大手ファーウェイ（華為技術）の副会長が逮捕された。米国は中国の通信大手企業を米国から排除する方針だ。しかし2年前のハルビン旅行をした時グーグルもヤフーもFBも作動しなかった。この本によると中国は2010年頃から通信の自由化に相当敏感になり、3年前にインターネットの世界で鎖国化（独立）を実現したようだ。

習政権になって人民（海外在住を含む）への情報統制は相当厳しいようだ。人民は共産党への忠誠が義務付けられ、国家総動員法のような法律も制定された。企業の定款には共産党第一が追加された。アリババのマー会長はこうした流れに嫌気がして会長を辞めたとさえ云われている。

今や米中貿易戦争の本質はハイテク覇権争いであることが明白になった。中国インターネットの急速な発達には共産党政権の存亡と深く関わるようだ。著者は、中国大衆は生活が第一で、思想や政権がどうであろうと余りに気にしないと解説している。果たしてそうだろうか？（注意；毎年20万件余の暴動が発生している。）

6. 「習近平のデジタル文化大革命」 川島博之著（講談社新書）

2018/10出版である。中国の戸籍制度、農民工、経済成長、人口推移、格差拡大、科挙、儒教かデジタルネット革命の現状を論じている。著者は東大准教授で中国農業を専門とする学者だ。

習政権下の中国では益々情報統制が進み自由空間が消えつつあるようだ。その根本には中国特有の戸籍制度があると説く。都市籍を有する4億人と農民籍9億人が厳格に分離されている。（著者のベストセラー「戸籍アパルトヘイト国家・中国の崩壊」に詳しい）

北京・上海・深センに住む恵まれた都市生活者と地方農民の経済格差が拡大しているようだ。不動産金融をエンジンに高度経済成長を続けてきたが、いよいよ終焉が近そうだ。

7. 「ユニクロ潜入一年」 横田増生著（文芸春秋）

2013年出版の「ユニクロ帝国の光と影」の続編である。日本一のアパレルメーカーのブラック企業体質を告発している。（注；前著に対して、ユニクロは名誉棄損で文芸春秋を訴えたが、2014/4最高裁で棄却され、敗訴確定済み）

2018年決算でユニクロの年商は2兆円超え、主な委託生産工場は中国とカンボジアだ。同社は1990年代から海外下請け企業100社余りに委託生産させている。

グローバル化は下請け企業の労働状況まで委託会社が責任を持つべき時代になった。企業の労務問題は古くて新しい問題だ。電通やゼンショーとワタミのハラスメント事件はまだ記憶に新しい。従業員の低賃金長時間労働はまだまだ多く、2017年の厚生労働省が社名公表した問題企業は1500社にも上る。

8. 「戦後リベラルの終焉」池田信夫著（PHP新書）

リベラル派（思想家・評論家・政治家・マスコミ）への痛烈な批判の書である。

戦後日本には左翼思想に憑かれた人々が存在する。その教祖がマルクスだ。その昔マルクス経済学は一世風靡したが、ソ連経済崩壊ですっかり人気は落ちた。しかし政治の世界では左翼思想は健在だ。現在の立憲民主党、国民党、共産党などはその流れに入る。メディア界では朝日新聞を始め一大勢力を形成している。

戦後日本は長く自民党中心の政権であったが、幅広い政策を包含する政権でもあったように思う。2008年に民主党に政権交代したが、その結果は余りに酷かった。特に外交安保政策はこの上なく幼稚で危ないものであった。この本はそうした戦後史を思想的に振り返ったものだ。

9. 「西郷隆盛」 圭室諦成著（岩波新書）

幕末はいろいろ謎の多い時代だった。これまで江戸幕府から明治維新の過程が余りに単純化されて理解してきたように思う。徳川幕府は薩摩藩との戦いで負けたというのが著者の結論だ。

島津斉彬は徳川に変わる政権を担う野望があった。その為薩摩の民衆への徴税は凄まじく、奄美大島や喜界島などの農民は、田畑を全てサトウキビに変更させられた。そして海外情勢に危機感を早くから持ち軍備増強に励んだ。幕末頃には最新鋭の武器弾薬は幕府より薩摩藩に多くあったようだ。そして幕府政権の鈍感さと人材不足が相まって西国雄藩の討幕に繋がった。

西郷は「慶応の功臣にして明治の賊臣」と言われたそうだ。明治新政府樹立後、西郷は征韓論に敗れ、薩摩で私学校という下級武士軍団を組成し、クーデター計画に巻き込まれる。薩摩藩には、大久保のような開明派もいたが、西郷は武士による封建的土地所有の再編と身分差別制の温存が理想であったと説く。これは明治新政府の方針とは相いれず西南戦争は必然だったという。

英雄「西郷」の裏の一面を描いた作品だ。

10. 「韓国・北朝鮮の悲劇 米中は全面对決へ」藤井厳喜、古田裕司著（WAC）

日韓関係は戦後最悪になった。韓国大法院〔最高裁にあたる〕が、徴用工訴訟で朝鮮併合時の施政を全否定して、戦時中の労働者4人の損害賠償を認めたのだ。これは1965年の日韓平和条約も無視するもので、正に革命政権の所作といえるものだ。流石に日本国民の多くが、この隣国が異様な価値観と歴史観を持ち、心底反日精神に侵された国家であることに気づいたのではないかと。尚最高裁判決は文大統領が2018年8月に最高裁判所判事3人を替えた結果だ。

このような文政権の現状と背景を二人の論客が、半島の過去と現在と未来を語った対談集だ。明治時代に唱えた福澤諭吉先生の「脱亜論」に通ずるものだ。米朝首脳会談から半年経つが進展はみられず先行き非常に不透明だ。

しかしなぜ韓国民が自由も人権もない暗黒国家「北朝鮮」に共感するのだろうか。南北統一への憧れはいくらか理解もするが、統一までの政治経済的な混乱やコストを考慮すれば、相当な悲劇が待っているように推察される。